

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム

第2回 外部評価委員会の概要

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムでは、第三者の視点からプログラムの運営についての評価を行い、その意見をプログラムの改善に反映させることを目的として、外部評価委員会を設置いたしました。ここに掲載するのは、平成25年11月7日開催の第2回外部評価委員会における評価・意見の概要です。

外部評価委員会の場で得られた評価・意見を、グローバルに活躍できる人材育成を目指す本プログラムの発展と進化に役立てていきたいと思っております。

なお、外部評価委員は以下の通りです。

(文責：超域プログラム自己点検・外部連携ワーキング)

外部評価委員 [役職名は、委員会開催当時のもの]

岸本 喜久雄	東京工業大学 大学院理工学研究科工学系長 教授
齊藤 紀彦	株式会社きんでん 代表取締役会長
大坊 郁夫	東京未来大学 学長
中野 健二郎	京阪神ビルディング株式会社 代表取締役社長
広渡 清吾	専修大学 教授
宮部 義幸	パナソニック株式会社 常務取締役

講評の概要

項目	内容
プログラムの進捗状況	【評価できる点】 <ul style="list-style-type: none">・全般的に順調に取り組みが進んでいると評価できる。・プログラムの全体目標を具体的に再設定したことは、オールラウンド型プログラムとしての意義を際立たせ、強化すると思われる。・新たに多くの科目が加わった結果、非常に多彩なプログラム構成となり、履修生諸君もそれに応じていることは非常に素晴らしく、今後が期待できる。・履修生諸君との懇談を通じ、その成長ぶりを感じることができた。

	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的課題に対する解決策の決定では、往々にして正反対の選択肢が提示される。空間的・時間的な広い視野から無数に示される対案の中から、如何なる評価軸で最終案を絞り込んでいくか——徹底した事例研修を通じ、履修生が体得できるようなプログラムの充実を期待する。 ・本プログラムの核心は、複眼的視座を有するリーダーシップの醸成にある。それゆえ、履修生がどのような価値観を抱き、それらをいかに共有するかという点が重要となる。複数の価値観からその共有項を考えさせる仕組みを見出してもらいたい。 ・「超域」というコンセプトに関わる問題として、専門性と超域性、グローバル性とローカル性、さらに理系と文系といった様々なファクター間の、自省と改善のプロセスにおける「循環」が焦点となる。循環とは、相互作用=相互媒介の関係であり、そうした関係を通じ主体の認識と行動が当初の出発点より豊富化することを意味する。あらためて「理系」、「文系」の双方について、その対象と方法論、思考形式等の独自性、相互関連、そして「循環」を自覚的に問題とすることが重要となるように思われた。
<p>育成されるべき人材像</p>	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの教育実践を通じ教員の考えも深まりつつあると思われるなかで、原点に立ち返り、育成すべき博士人材の資質とその育成の仕方について検討が進んでいる点は評価できる。望ましい博士人材像の核となる資質について、さらに検討が深まることに期待したい。 ・将来を期待できる意欲ある履修生を全学から選抜し、特色あるプログラムにより、近年少なくなった能動的課題解決型人材の育成ができつつある。産業界の将来を支える人材として大いに期待できる。
	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークにおける集団としての強みが強化されている一方で、強い個を育成する視点でのプログラムの強化が必要である。

カリキュラム全体	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムの構成が絶えず状況に柔軟に対応しながら変更されており、工夫されている。 ・特に、カリキュラム開発において多様な科目を創設する試みがなされており、今後の発展に期待が持てる。そのなかで、他大学にも参考になる優れた講義が開発されることが望まれる。 ・この目標に沿って、プログラムの内容も、文理クロス型のメンターの配置、社会的課題解決ラーニング、超域イノベーション海外実習など、工夫・改善され、経済界の理解促進活動にも動いているのは心強い。 ・履修生諸君が本プログラムの学修のなかで「新しい試みの中に自分たちはいる。とにかく必死で頑張る中で、自分の何が変わりつつあるのか、自分で自分を批判的に認識し、自省し、自己の変化を考える」という意識をたえず更新しつつあることを強く認識させられた。これは、本プログラム自体が、このような問いかけと自省・改善のプロセスにおいて進行すべきものであるということを実に表現する。そうした在り方がプロセスにおいて自覚されていること——つまり、プログラムから履修生がどのような力を身に付け、どう変わりつつあるか、また履修生にとってそれがいかなる意味を持つかといったことがプログラムの遂行全体と個々の授業のなかで、教員と履修生によって共に問われ、追求されていること、この点を確認することができた。
	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・履修生には、自らが決断するトップリーダーたる役割に加え、トップリーダーの決断に資するような文理統合型の学識者としての役割も同時に求められる。すなわち、専門外の人にその内容を理解させうるインタープリターの役割である。この点で、「理系の言葉を教える、理解する」という教育科目とともに、「文系の言葉」の理解に資する科目も加えてもらいたい。 ・きわめて多彩に準備されている授業科目の狙い目が何処にあるかが、履修生自身がわかることが重要である。「この科目ではここがポイントである」といった具合に、その核心が優先順位とともに伝わる仕組みを工夫されたい。 ・自ら本プログラムを選択した履修生諸君はレベルの高い、意欲に燃える人達であるので、今後のカリキュラムは、履修生側の独創的提言も組み入れつつ、担当教員と履修生が互いに刺激し合いながら、深めていって頂きたい。

履修生の 選考	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2期履修生との懇談によれば、オールラウンド型と複合領域型との違いをよく理解し、考え抜いた上で本コースを選んだとのことであり、強い意欲を感じた。大学側が学生の混乱を避けるべく、事前の丁寧な説明を心がけた結果と評価したい。 ・学内外への適切なアピールができており、本プログラムへの関心が高まり、それが刺激となりプログラムの質、履修生のレベルが向上している。 <hr/> <p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他のプログラムが強化されつつある中で、本プログラムの認知度が相対的に下がることのないよう、さらなるアピール策の拡充・強化が求められる。 ・多様な学生の参加という観点から、修士課程までの途中参加、あるいはプログラムの一部を履修する学生に対して門戸を開いてはどうか。博士課程と修士課程に所属する学生の混在講義は、やり方によっては高い教育効果を期待できると思われ、実施に値する。 ・履修生との懇談の中で、学部学生時代の進路選択について確認したところ、本プログラムがあったからこそマスター修了ではなく、ドクターコースに進学したと伺った。これは、本プログラムの存在が、コア人材、リーダー人材の育成という目的により、学部学生の潜在的能力を引き出すことに有意義な役割を果たしたことを示しており、確認すべき重要な成果として、今後の履修生募集にも生かされるべきである。
担当教員	<p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告された授業の実践例からは、担当者が楽しんで授業に取り組んでいる様子が伝わり、よいと思う。教える側の楽しみがなければこの種のプログラムは継続しがたいので、こうした方向にさらに進んでほしい。 ・カリキュラムが進行していく上で、担当教員の方々も種々の工夫をされており、その内容も変更されるなど、試行錯誤を繰り返し、努力している。 <hr/> <p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主専攻の指導教員にあっては各々のコミットメントの仕方の面で、いまなおかなりの凸凹があることが推測される。全学で取り組むべきプログラムである以上、主専攻の教員たちをプログラムに巻き込む工夫についても、さらに多彩なかたちでその強化を試みていただきたい。

<p>取組みの全学的な展開</p>	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムのような取組みを契機に大学院における教養教育の在り方に関しての全学的レベルでの議論が行われるようになると、さらに好ましい。 ・本プログラムも来年度は第3期生の募集で、その5年目は文科省予算の裏付けがない状態が始まるが、厳しい国の財政状況の中で単純な予算継続は期待し難い。大学としての戦略構築が必要である。
<p>将来におけるプログラムの継続</p>	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育効果を検証しつつ、卓越した大学院教育プログラムを構築することを目標に、今後も意欲的に取組みを進めていただきたい。 ・リーディング大学院での履修生支援は、その継続性において大きな問題を残している。今から文部科学省との折衝を行うことが必要であり、大阪大学とその学長自身が覚悟を持って、この事業を完遂させるべきである。
<p>社会への発信・社会との連携</p>	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フューチャーリーダーズ・フォーラムの開催などの学外関係者との連携を強化する取組みの充実を望む。博士人材の育成に関し、大学関係者に留まらず産業界をはじめ広範囲の注目を集めるような働きかけに期待したい。 ・経済界の理解促進活動はまだその第一歩が見えたところである。有効な連携の場の形成に向けて、大学側から各経済団体のさらなる積極的な働きかけを切望する。 ・海外への発信も検討されたい。我が国の博士人材育成の取組みについて海外から関心を持たれることで、ひいては我が国の大学への評価の向上に繋がると思われる。 ・いろいろな人を巻き込み様々な知恵を借りながら、ブレイクスルーを目指してほしい。わが国のリーダー人材育成を目指す本プログラムは、政治家たちも現在重要と考えている事項であり、早めの対応が必要である。単なる実験でなく、あくまでも有為な人材を創るためのプロジェクトであるということを、重ねて指摘したい。

<p>評価・検証</p>	<p>【今後に向けての要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2期目の履修生の参加により、学年進行に伴う履修生の成長を評価できるようになりつつあると思われるので、これまでの取り組みの教育効果についての自己点検を進めていただきたい。 ・さらに、修士課程から博士課程に亘る教育によってどのように履修生を効果的にステップアップさせていくのかについての検討をお願いしたい。 ・各科目の履修生の満足度が共有できる仕組みも重要である。つまり、各科目の何が満足度につながっているかという点の分析を通じ、履修生の側において、授業満足度に関する比較が行えることが大切である。 ・本プログラムのプロセスの評価に加え、アウトプットの評価、すなわち履修生の成長度合いの評価ができる工夫、すなわち、評価委員が個々の履修生と面談する機会を増やすなど、をお願いしたい。 ・博士論文では、この超域プログラムにおいて領域の異なる人間とともに学んだという経験が、研究の成果に反映されることを是非とも期待したい。
--------------	--